

カメルーン、ガルアの都市形成過程覚書

小林 未央子

1 はじめに

アフリカでは、ヨーロッパによる植民地化がなされる前から、多くの王国が存在してきた。特にサハラ以南の黒人アフリカには、そのような王国が、住民人口との比率でいえば世界のほかの地域と比べてきわめて高い密度で存在した [川田 1999]。

この一つに、フルベ・イスラーム王国群⁽¹⁾がある。この王国群には1804年以降、ウスマン・ダン・フォディオに率いられた牧畜民フルベ族を中心とするムスリム集団が行なったジハード (Fulani Jihad [英]) によって成立したものがある。

このフルベ・イスラーム王国の一つにガルア Garoua がある (図1 参照)。ガルアはジハードに参加したフルベ族のうち、ウォラーベ Wolarbé クランによって建設された王国である。ガルアはその後、20世紀初頭にはカメルーン北部の植民地統治の中心都市となり、カメルーンの独立後は、北部州⁽²⁾の州都となった。すなわち、一貫して北カメルーンを中心都市として位置してきた。



図1 カメルーン共和国図

ガルアは、このように時代の変遷とともに、王国⇒植民地統治中心都市⇒州都と変化してきた歴史を持つ。その中で、植民地統治中心都市の過程において、北カメルーンに所在するガルア以外の王国の王、ラミド laamido⁽³⁾や地域の大首長たちは、植民地政府と接触するための出張所として、王（ラミド）の屋敷（王宮）をガルアに作った。その後、この王宮を中心に街区が形成され現在に至っている。街区の名前には、各王国・地域名に「-ré」をつけるのが慣例である。

カルチエ・ライレ quartier Rey-ré もその一つで、これはレイ・ブーバ Rey-Bouba 王国出身者街区（集住地区）の意である。カルチエ・ライレにあるレイ・ブーバ王国第1王子宅において、筆者はこれまで住み込み、「王族女性の都市生活」、「王族女性の妊娠・出産」に関して調査を行なった⁽⁴⁾。この中でカルチエ・ライレの形成過程の聞き取りも合わせて行なった。

本論は、ガルアに関する筆者の現地調査およびエルドリッジ・モハンマド Eldridge Mohammado による口頭伝承等資料をもとに、現在のガルアがどのように形成されてきたかについて、ジハード、植民地化、そして現在のガルアの順に、主に住居区に関して形成過程の整理を試み報告するものである。

2 アフリカにおける都市の形成過程による分類

(1) サウゾールの分類

ガルアを含めたアフリカの諸都市は、サウゾール Southall, A.W. の分類によって、AタイプとBタイプに類型化される [Southall 1961]。Aタイプはアフリカ社会の自生的発展によって形成され発達した伝統都市であり、Bタイプは19世紀以後のアフリカ大陸の植民地化以後に成立し発達した植民地都市である。

こうしたAタイプの都市には、東アフリカ沿岸部で発達したスワヒリ都市、サハラ砂漠を縦断する広域交易の中で発達したサハラ交易都市、王国の成立・発展によって王都として発達したハウサやヨルバの伝統的王国都市などがある。

実際には、アフリカの都市では、この両タイプが旧市街と新市街という形で接合している場合が多く見られる。Aタイプの都市の多くは、植民地時代に植民地行政の中心都市としての機能が付加され、多くがAタイプの旧市街に、Bタイプ

の新市街が併設されるかたちで発達した例が多い [日野 1983]。

(2) 日野の分類

伝統的王国都市に関しては、さらに2つの類型が考えられる [日野 1992]。一つは非イスラーム型、もう一つはイスラーム型である。非イスラーム型は、もともと非ムスリムの王によって成立したものをさす。その後イスラーム都市文化の影響はあったにしても、あるいはのちにその王がムスリムに改宗したとしても、この場合非イスラーム型と分類する。一方、イスラーム型は特に19世紀初期から展開したムスリムによるジハードによって成立したものをさす。

(3) 嶋田の分類

イスラーム都市をその性格によってさらに類型化したものに嶋田の分類がある [嶋田 1988, 1997, 2001]。嶋田は、サハラ以南、西アフリカのイスラーム都市形成を4つに分類している。サハラ縁の交易イスラーム都市 (Wa型)、湿潤サヴェンナ交易都市 (Wb型) の交易型2類型と、土着政治権力と融合した二元的政治イスラーム都市 (X型)、フルベ族のジハードによって成立した一元的政治イスラーム都市 (Y型) である。

(4) ガルアの都市形成

以上の分類を参照することで、ガルアの都市形成、都市の性格を特徴付けることが可能である。フルベ族のジハードによって成立したフルベ・イスラーム王国を原型とするガルアは、サウゾールの分類によれば、Aタイプのアフリカ社会の自生的発展によって形成され発達した伝統都市、に分類されよう。しかし、ガルアも、アフリカの伝統都市と同様、植民地化以前からの伝統都市の部分に植民地行政の中心都市としての機能が付加され、それが旧市街と新市街という形で接合し発展しているという特徴が見られる。

さらに日野の分類を参考にすれば、ガルアは、伝統的王国都市のなかでも、19世紀初期から展開したムスリムによるジハードによって成立したものをさす「イスラーム型」であり、気候、成立状態に注目した嶋田の分類を参考にすれば、イ

スラーム原理に則して成立したイスラーム国家の王都、フルベ・イスラーム王国群の王都であり、Y型に分類される。

このように、これまでの分類にしたがって、ガルアという都市の生活・特徴を示すことが可能であるが、次章では、ガルアの都市形成過程にとって歴史的に非常に重要な、フルベ・イスラームのジハード、植民地化を取り上げ整理する。

3 ガルアの都市形成過程

(1) フルベ・イスラームのジハード以前

フルベ族のジハード以前のガルアには、Ni-Dara (Tingling), Toumri, Sonayo, Goungou, Senri, Deuri, Fali等のグループが生活しており、その中でも主だったのはFaliであった [Bassoro et Mohammadou 1980]。彼らのムラはガルアでも高地部にあったが、耕作は低地で、漁撈はベヌエ川支流で、狩猟は疎林部で行ない、こぶなし牛の飼育も行なっていた [Bassoro et Mohammadou 1980]。

(2) フルベ・イスラームのジハード以後

ガルアの実際の歴史として、ガルアで現在語られるのは、この地域にフルベ族が到着した後のことである。ガルアに至ったフルベ族は、ウォラーベ克蘭であり、マーシナ帝国のマリがオリジンであると知られている。彼らは東方へ東方へと移動し、ガルアに到着した [Bassoro et Mohammadou 1980]。

ウォラーベ克蘭の長、Ardo TAYROUが現在のガルアに着き、居を構えたあたりは、現在ガルア・ウィンデ Garoua Winde と呼ばれており、それはガルアという名前の付いた最初の場所であった。長老者はガルア・ウィンデをガルア・イエロワ Garoua Yelwa、つまり「母なるガルア」と呼んでいる [Bassoro et Mohammadou 1980]。

その後、彼らは他からの急襲に対してより効果的に守れる、鋭い棘でできた背の高いあばら屋を建築し、いくつかの小屋と井戸や家畜小屋を備え、そこはRIBADOU (de l'arabe ribat = 強い場所、要塞) と呼ばれるようになった [Bassoro et Mohammadou 1980]。Ardo TAYROUによって建設されたガルア

は、Mallum Issa の統治時代、発展し1つの都市となったが、人口の急増や周辺部族の集住によって、植民地化以前すでに19世紀後半には、都市的様相を呈していた [Bassoro et Mohammadou 1980]。

(3) 植民地化後

上述のように、19世紀後半には、都市的様相を呈していたガルアであった [Bassoro et Mohammadou 1980] が、その後の植民地時代、間接統治方式によって、カメルーン北部の他のフルベ・イスラーム王国同様、利用されてきた。そのなかでも、ガルアは特別な利用のされ方をしたといえる [嶋田：1987, 1995]。ガルアは伝統性を保持しながらも植民地体制の中で、カメルーン北部の中心都市として利用されてきたという歴史を持つ都市なのである。

植民地化の波と共にガルアに到着した最初の白人は、ドイツ人で、1901年のことであった⁵⁾。カメルーンは独領カメルーンとして成立したが、ドイツによって実際に征服されて成立した植民地ではなく、ドイツと英仏間の外交交渉によって成立した [嶋田 1995]。

ドイツは、北カメルーンの植民地統治の中心地としてガルアを選び、そこにドイツ軍の駐屯地を置いた。ドイツは、ガルア周辺のラミドや大首長と植民地政府の仲介者として、ガルア王国のラミドを位置づけた [Bassoro et Mohammadou 1980]。

ドイツは、北カメルーンに所在する王国のラミドや地域の大首長たちに、植民地政府と接触するための出張所としての王宮をガルアに設置させた。これを機会に、王の屋敷の周辺に、王国出身者の集住する街区が形成されるようになった。20世紀初頭には、カルチエ・ライレを含む、Madagaliré、Démsaré、Basséworé、Bibémiré、Yélwa (Ngaoundéré)、Mandararé、Tchéboware、Béré、Kaywangré、Holwaré がガルア市内に分布していた [Bassoro et Mohammadou 1980]。

ガルアに作られた王の屋敷には、通常、奉仕者 (les serviteurs) が置かれていた。王の不在時に手続きを行うためである。口頭伝承によれば、各国の王 (ラミド) や地域の大首長は通常はガルアに居らず、それぞれの王国で暮らしていた。しかし、行政府によってガルアに召集された際には、多数のお供をつれて集まっ

たという [Bassoro et Mohammadou 1980]。

そうした植民地統治時代の名残が、ガルアに点在する王の大きな屋敷とその屋敷を中心に形成されたカルチエ（街区）である。カメルーン北部に点在するフルベ・イスラーム国家は軍事力を持っていたことから、植民地支配側にとっては脅威であった。そのため植民地統治側はそうした王国を崩壊させるのではなく、前述のように間接統治という方法を選択した。

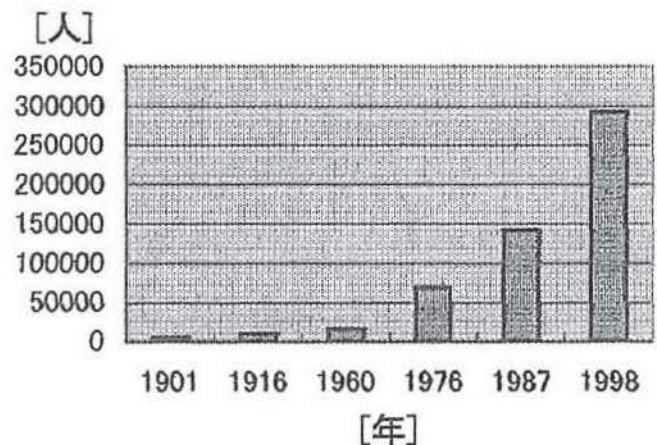
そして、植民地統治側のドイツは、ガルアにその拠点を置き、各王国の出張所と連絡をとった。19世紀後半には都市的様相を呈していた王国は、植民地主義の到来で人口が増加するとともに、より広い地域からの移住者つまりさまざまな王国の人々の混住する都市としての性格を持つようになったといえる。

第1次世界大戦のドイツの敗戦によって、独領カメルーンは英仏の信託統治領に分割された。そして北カメルーンの大部分がフランスの信託統治領となった。北カメルーンは経済的に利益をもたらさうる植民地ではなかったこともあり、独領から仏領に変わっても、間接統治政策が適用された。現在この地域の公用語がフランス語であるのも、仏領植民地としての40年余りの歴史と関係している。第2次世界大戦、独立以降、特に1980年代後半からは近隣諸国から移民の増加を主な要因として急激な人口増加が見られる。

(4) 人口の変遷（表1参照）

ガルアの人口は植民地時代は非常にゆっくり増加した。1901年（ドイツ占領下）は約5000、1916年フランスの占領下は1万弱であった。独立（1960）直後は15000、以下68800（1976）→142000（1987）→293081（1998）[Annuaire statistique du Cameroun 1999]、と1980年代後半に人口は急増したと言えよう。その要因としてガル

表1 ガルアの人口推移



アで語られるのが、チャド、中央アフリカ、ナイジェリアからの移民の多さである。移民の多くは、単身者住居区もしくは家事労働・住み込み形態で、ガルアで生活している⁽⁶⁾。

4 ガルアの現在像

ガルアにおける人口は、現在、29万3081 [Annuaire Statistique du Cameroun 1999] で、経済都市で人口100万都市のドゥアラ、首都ヤウンデに次ぐ、カメルーン第3の都市であり、北カメルーンでは第1の都市となっている。

現在のガルア（図2参照）は、ガルア王国の王宮の位置する、植民地化以前から存在する旧市街地と、郵便局、銀行、官公庁の位置する行政パート、植民地化以降現在まで徐々に形成された主な20弱の住居区、そして国際空港、長距離バス発着所、中央マルシェ、コカ・コーラ工場、学校、病院、町に点在するモスク等から成り立っている。

住居区はその性質からガルアの人びとによって分類されている。

(1) 中心5地区

フルベレ（1～4区までである）、ハウサレ、コレレ、イエロア、スアリを指す。これらは、ガルア王の王宮に隣接した区であり、植民地以前から存在している部分がほとんどである。5つの地区は実際、ガルアの中でも人口集中が起きている地区である。

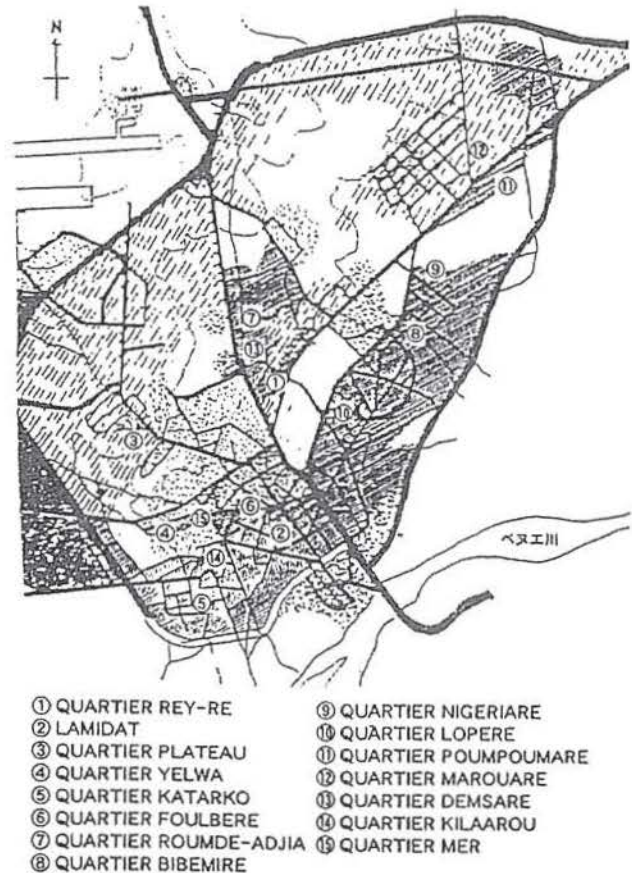


図2 ガルア市街地

(2) 周辺部の主な6地区

周辺部の主な地区はルンデーアッジャ、ビベミレ、ロペレ、ライレ、デムサレ、バシェオレである。(1)の中心5地区から2, 3 km東方に位置している。ルンデーアッジャ、ライレ、デムサレは、交通網が整備されたビベミレに比べて全体的に不均整である。

(3) ガルア最周辺の地区

さらに周辺部には、ウーロ・ウルソ、セクター・ジャンプトゥ、ウーロ・スレイ、プンプムレが位置している。これらの地区はガルアの中心からかなり離れたところに位置する。これらには整備された道路はほとんど走っておらず、中心5地区や官公庁街に比して都市的様相はみられず、人口密度も低めである。

(4) 住居区の概観

ガルア市街地の住居は、1960年代までは、住居区は藁屋根を乗せた土壁の丸小屋から成る、非常に大きな住居が優勢で大変伝統的な外観であったが、それ以降に建設・再建設された屋敷群は狭い路地網に密集した、緻密な骨組みのトタン屋根のついた長方形の建物へと変わっていった。

5 おわりに

以上のように、本論ではガルアの都市形成過程を既存の分類方法によって分類するとともに、併せて、ジハード前後、植民地化後、現在の順に整理を試みた。ガルアは現在もカメルーンにおける、重要な都市であり、市内に点在する伝統王国出身者街区は現在でも、北カメルーン第1の都市ガルアを訪れる伝統王国出身者の実質の受け入れ先となっている。こうした伝統王国と都市との関わりについて、筆者はこれまで都市居住者の視点から既にいくつかの報告を行なった〔小林1999, 2001a, 2001b〕が、今後引き続き伝統王国での調査を行い、そこから都市の姿を捉えていくことで、都市一王国関係の現在の姿をより深く抽出できるものと考えている。

注

- (1) フルベ・イスラーム王国に関して、まず、レイ・ブーバ王国やガルの歴史に関する口頭伝承を収集したカメルーンの学者エルドリッジ・モハンマドの研究が挙げられる (Mohammadou 1979、BASSORO et MOHAMMADOU 1980)。また、王国の成立過程 (Mohammadou 1979、嶋田 1984、1985、1993)、イスラーム化 (Trimingham 1966、嶋田 1988)、王 (日野 1984b、嶋田 1995)、政治・統合制度 (嶋田 1982a、1984)、王国を支える経済基盤 (嶋田 1982b)、フルベ族の民間説話 (江口 1996、1997、1998、1999)、フルベ・イスラーム都市 (日野 1984) 等、さまざまな角度から、フルベ・イスラーム王国に関する研究がなされてきた。
- (2) カメルーン北部は、以前は北部州という一つの行政区分であったが、現在では北から、極北部州、北部州、アダマワ州に分割されている。
- (3) カメルーンでは、北カメルーンに点在する伝統王国は、フルベ語で「王国」を意味する「ラミダ」(Lamidat) という語で呼ばれており、その首長は「ラミド」と呼ばれる。この呼称のもととなっているのは「ラミード」(lamiido, laamiibe [複]) というフルベ語表現である。
- (4) 1998年11月から1999年1月、および1999年12月から2000年3月まで、文部省科学研究費補助金国際学術研究「アフリカにおける伝統王国の社会変化の比較研究」プロジェクト (課題番号: 10041162、研究代表者: 静岡大学人文学部、嶋田義仁教授) により、カメルーン、ガルにおいてフィールドワークを行った。調査方法は、ガルのレイ・ブーバ王国出身者街区 (集住地区) での住み込み調査で、インタビュー、イスラーム行事・女性の集会への参与観察を行った。調査言語は、部族後の場合は通訳を介し、他はフランス語および英語を使用した。フルベ語は現在習得に努めている。次からの調査では使用していきたい。
- (5) ドイツが北カメルーンを支配する以前、イギリス人が商売のためにガルまで船でベヌエ川をさかのぼったことはあった [Mohammadou 1977]、植民地化を機に初めてガルに来たのはドイツである。
- (6) ガルのカルチエ・ライレのメイドの労働については、[小林1999] を参照のこと。

主な参考文献

江口一久

1987「フルベ族の歴史」『黒人アフリカの歴史世界』川田順造編、山川出版社

1996『北部カメルーン・フルベ族の民間説話集1』松香堂

1997『北部カメルーン・フルベ族の民間説話集2』松香堂

1998『北部カメルーン・フルベ族の民間説話集3』松香堂

1999『北部カメルーン・フルベ族の民間説話集4』松香堂

川田順造

1992『サバンナの王国』リポート

川田順造編

1999『アフリカ入門』新書館

小林未央子

1999「北カメルーン、ガリアにおける王族家族の都市生活—女性の日常生活を中心に」

嶋田義仁（編）『アフリカ伝統王国研究1』静岡大学人文学部文化人類学教室

2001a『アフリカの伝統王国における女性の社会的役割』（平成12年度埼玉大学大学院修士論文）

2001b「王族女性の妊娠・出産」嶋田義仁（編）『アフリカ伝統王国研究2』名古屋大学大学院文学研究科比較人文学講座

嶋田義仁

1982a「サバンナのイスラム王国レイ・ブーバ：そのドレイ制とハーレムの論理」『季刊民族学』20：75-91.

1982b「サバンナの“資本”と“資本家”」『季刊民族学』22号p.114~130

1984「イスラム国家原理と部族社会原理—北カメルーン，レイ・ブーバ王国の場合—」『アジア・アフリカ言語文化研究』28:48-99

1985「アフリカの国家形成」『創造の世界』54:94-123.

1987「間接統治下における伝統国家の政治動態—北カメルーン，レイ・ブーバ王国の場合」和田正平（編）『アフリカ民族学的研究』同朋舎出版

1988「西アフリカ内陸イスラム都市の3類型」『イスラムの都市性・研究報告』7:1-13, 東京大学東洋文化研究所

1993「ジェンネ」『季刊民族学』66:6-21

1995『牧畜イスラーム国家の人類学』世界思想社

1997「アフリカにおけるイスラーム改心を回る三理論」『宗教哲学研究』14:41-66

1998『優雅なアフリカ』、明石書店

2001「サハラ南縁のイスラーム都市」『アフリカの都市的世界』世界思想社

日野舜也

1983「アフリカの都市と近代化」『アフリカハンドブック』講談社

1984a『アフリカの小さな町から』筑摩書房

1984b「アフリカでムスリムになるということ」上岡浩二他編『イスラム世界の人びと1』東洋経済新報社

- 1984c「座談会 イスラム世界の都市民」三木亘他編『イスラム世界の人びと5』東洋経済新報社
- 1987「北カメルーンのフルベ都市ガウンデレにおける部族関係と生業分化—フルベ都市民族誌」、『アフリカ 民族学的研究』、和田正平編、同朋舎出版
- 1992「アフリカの伝統的社会と近代化」『アフリカの文化と社会』頸草書房
- Ministere de l'Economie et des Finances, 1999 Annuaire Statistique du Cameroun 1998.
- BASSORO, Modibbo.A. et MOHAMMADOU, Eldridge, 1980 Garoua: Tradition Historique d'une Cité Peule du Nord-Cameroun. Édition du Centre national de la Recherche scientifique, Paris.
- BOUTRAIS, Jean 1978 Deux Etudes sur l'Elevage en Zone Tropical Humide (CAMEROUN). ORSTOM, Paris.
- MOHAMMADOU, Eldridge
1977 Histoire de Garoua. O.N.A.R.E.S.T.
1979 Ray ou Rey-Bouba. Edition du CNRS, Paris.
- SOUTHALL, A.W. (ed.) 1961 Social change in modern Africa, London.
- TRIMINGHAM, J. 1966 Islam in Africa, OUP

(こばやし みおこ 文化人類学)